

平成26年度公立高等学校配置計画地域別検討協議会（空知南学区）

平成26年4月23日

於 岩見沢市

<教育長発言要旨>

夕張市教育委員会の小林であります。

「新たな高校教育に関する指針」に基づく高等学校の再編適正配置も8年目を迎えようとしているが、この間、生徒数の減少とはいえ、統廃合、新たな高校の設置等現在整備が進められています。

夕張市は、平成22年度には中学校が、平成23年度には中学校がそれぞれ一校となり、幼稚園、小学校、中学校、高校が市の中心部に集約されたことから、幼、小、中、高の連携した教育についても、相互の情報交流を中心としながら、様々な模索をしているところである。

昨年、8月、夕張市高校対策委員会は、「平成27年度入学生募集を2学級に戻していただきたい」を中心とした要望書を提出させていただきました。現在、中学校の卒業予定者は65名となっており、今年度の夕張高校への地元中学校からの入学生は66%であり、2学級の確保は絶対条件であります。強く、要求したいと思っております。

本市は旧産炭地域に共通な「石炭産業の興隆と衰退」が半世紀余りの間に急激に起こったことによる人口減少と少子化の中で昭和40年代前半には6校あった高校が段階的に統廃合され、現在、夕張高校1校を残すのみという状況下にあります。

地域にとって、交通アクセスが充分でないことから、たとえ、規模が小さくなっても、進学にも、就職にも応えうる高等学校の存在は多くの市民の願いでもあります。

都市部を中心とした適正といわれる4～8間口校の対極に、私どものような過疎で通学が困難な地域の小規模校が北海道には多くあることも事実です。そうであるならば、もっと、そこに教職員定数も含め魅力ある学校を創るための手立てがほしいと願うものです。

昨年、「キャンパス校、センター校」についても、道教委の新しい高校づくり推進室の方に来ていただき、説明をいただいたところではありますが、遠隔授業、出張授業の対応があるとはいえ、とりわけ、出張授業、一週につき八時間程度では、地域の声「進学にも就職にも応えうる高校」には不十分と言わざるを得ません。教員の定数加配、臨時講師、非常勤の配置拡充こそが、北海道らしい魅力ある「センター校、キャンパス校」につながっていくのだろうと考えます。ご検討願いたい。